

第2学年2組 道徳科学習指導案

授業日 平成27年7月9日(木) 5校時

授業者 附属新潟小学校 教諭 劔 仁美

会場 2年2組教室

1 主題名 なぜ正直に行動することが大切なのか (1-(4) 正直, 誠実)

資料名 いばるな, トマト

(出典「新版 こころ つないで2」いばるな, あさがお 教育出版 一部改作)

2 本主題の価値

本主題は、学習指導要領第1学年及び第2学年の内容1-(4)に準拠して設定したものである。

- 1 主として自分自身に関すること
(4) うそをついたりごまかしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。

子どもは、1-(4)の内容である「嘘をついたり、ごまかしたりしてはならない」「自分の過ちを認め、正直に謝らなければならない」ことは、概念的に知っている。しかし、実生活の中で過ちを犯したときには、苦しい立場から逃れようと、嘘をついたりごまかしたりするという行動をとることがよくある。そして、多くの子どもは、その行動により、どんどん苦しい立場に陥り、辛い思いをしたという経験をもっている。一方で、正直に過ちを認めたことで、辛い思いから解放された経験をもつ子どももいる。ところが、これらの貴重な経験が意識化されていないため、次の機会の判断に活かされずに、再び嘘をついたりごまかしたりという行動を取ってしまうことにつながってしまう。

この自己保身的なうそやごまかしが辛い思いを引き起こしたという経験、正直に過ちを認めることが辛い思いからの解放をもたらしたという経験を意識化させることで、1-(4)の内容の大切さを実感をもって納得させたい。

そのために、資料「いばるな あさがお」を一部改作して、提示する。子どもは、現在生活科で野菜を育てているため、「いばるな トマト」と改題する。資料の内容は、以下の3つの場面で構成している。

【子どもが、生活経験(言わなくてはいいないが、なかなか言い出せない経験)を想起しやすい場面】

- ① 一人一人が育てているトマトの鉢が並んでいる。中でも、けんじくんのトマトが一番大きくて威張っているように見えた。主人公の「ぼく」は、「こら、いばるな。」とけんじくんのトマトの実を指でちゃんと触った。帰りの会で、けんじくんが「ぼくのトマトの苗の先っぽが折れていました。誰か知りませんか。」と自分のトマトの苗が折れていたことを告げた。ぼくは、(ぼくが触ったからだ)とドキッとす。そして、言おうか言わないか迷う場面。

【言い出せないでいると、状況が悪化し、ますます言い出しにくくなる場面】

- ② 次の日、学校に行くと、みんながけんじくんのトマトの話をしていた。主人公のぼくは、言わなくちゃと思いつつも、まだ言い出せないという場面。

【主人公が正直に謝る場面】

- ③ 主人公のぼくは、思い切ってけんじくんに謝る場面。

このような場面で構成されている資料を用いることで、子どもが自分の生活経験とかかわらせながら、主人公の「ぼく」の気持ちや行為について考えることができる。また、ただ謝るだけでなく、「もっと早く謝るべきだ」とよりよい解決方法を発見し、実感を伴って正直、誠実の道徳的価値を理解することができる資料でもある。

資料をきっかけとして、主人公の行為や友達の多様な見方や考え方、感じ方に触れ、よりよい解決方法を見いだす学習を繰り返していくことで、子どもは実際の生活場面でも活かそうと考えるようになっていくのである。

3 本主題で目指す姿と「中核的な学習内容」「学びをつなぐ力」

(1) 目指す姿

よりよい解決方法を見いだす子ども

自分の生活経験と主人公の行為や気持ちを結び付けて「なかなか正直に言えない」という人間の弱さを理解しつつ、「嘘やごまかしは、苦しい気持ちを引き起こしてしまう」ことに気付き、「正直に過ちを認めることが大切なんだ」と実感をもって納得しよりよい解決方法を見いだす姿。そして「〇〇さんの考えを聞いていたら考えが変わった」などと、どのようにして考えが変わったかという見だし方を自覚する姿。

(2) 「中核的な学習内容」

(うそやごまかしをしているときの辛い思いを想起し、そのようにならないために)「正直に行動することが大切なんだ」という見方・考え方に至ること

(価値観の高まり)

(3) 「学びをつなぐ力」

関係付けるすべを用いて、自分の生活経験と主人公のぼくの行為や気持ちを結び付けて考える力。

4 指導計画 全2時間(60)

単元カード参照

5 指導の構想

子どもは、自分の生活経験から様々な見方や考え方、感じ方をもっており、それぞれの生活経験や生育環境などで異なる。このような子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け1

資料①を提示し、似たような経験を語らせ、主人公の気持ちに共感させた後に「自分だったらどうするか」と問う。

個々の見方や考え方、感じ方を表出させるための働き掛けである。資料の場面①を人形劇で提示しながら読み聞かせる。本資料は、主人公であるぼくの気持ちが子どもの生活経験から想起しやすいものである。資料①の内容を知った子どもは、自分の生活経験とかかわらせながら、主人公のぼくの気持ちに共感する。主人公が置かれている状況を踏まえ、気持ちを考えさせることで、子どもは主人公のぼくの気持ちに共感するのである。主人公のぼくの気持ちに共感させた後「似たようなできごとはないか」と問う。子どもは主人公のぼくの気持ちと似たような経験がないかと考え始める。経験の想起には、「できごと財布」を用いる。「できごと財布」は、子どもの経験がつまっているという想定で財布で、子どもに似たような経験を想起させるための道具である。資料と自分との間に「できごと財布」という経験想起の契機となる道具があることで、資料の場面と自分の生活経験との行き来がしやすくなる。

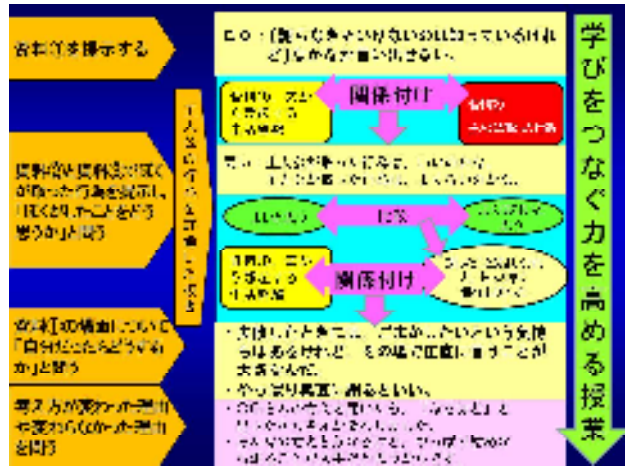
主人公のぼくの気持ちと自分の生活経験を十分に語らせ、「(このようにとき)自分だったらどうするか」と問う。子どもは、自分の生活経験と資料の場面とをかかわらせて「謝らなきゃいけないのは知っているけれど)なかなか言い出せません。友達が集まってきて騒ぎになっている中では言い出しにくいからです」(※C1の子どもの姿が本研究におけるC0とする)と「自分が取る行為」と「これまでの経験」とをかかわらせながらワークシートに記述する。

資料の場面提示は、人形劇で行う。人形劇は、紙芝居の枠の中で行う。枠の中で場面を提示することで、その場で起こっている状況や、登場人物同士のかかわりを限定して提示することができる。

働き掛け2

資料②を提示し、似たような経験を語らせ、資料③(対象)を提示し、「ぼくがしたことをどう思うか」と問う。

問いをもたせるための働き掛けである。資料②を提示し、主人公のぼくの気持ちを問う。「言い出せない」という気持ちに共感している子どもは、言わなかったことで大騒ぎになってしまったこと(資料②)を知り、主人公の気持ちを考える。ここでは、言い出せなかったことで大ごとになってしまったという生活経験を「できごと財布」で想起させる。資料①と②の主人公のぼくの気持ちに共感している子どもに、資料③(「対象」)を提示する。すると、子どもは関係付けるすべを用いて、自分の生活経験と主人公のぼくの行為や気持ちを結び付けて考え「正直に言えてよかった」「これでいいのかな」などと、主人公の行為について考える。「これでよかったのかな。もう少し早く言えなかったのかな」などというつぶやきを取り上げる。「いいのかな」「これでは、ダメなんじゃないかな」などという、主人公のぼくの行為に対する発言に同意するかどうかを挙手で確認する。挙手した子どもを問いをもった姿とする。学習課題として「ぼくがしたことをどう思うか」を設定する。そして、主人公のぼくの行為を数直線上に評価させ、ネームプレートで表させる。すると、主人公のぼくの1つの行為に対する個々の見方や考え方、感じ方の違いがあること気付く。その後、行為を評価した理由を問い、発表させる。子どもは、自分の見方や考え方、感じ方と、友達の見方や考え方、感じ方を比べ「(資料のような場合には)もっと早く謝った方がよかった。そうすれば、嫌な気持ちにならなくて済んだから」などと、主人公の行為に対する見方が変わる。ここでは、変わるだけでなく「やっぱり謝ることが大事なんだ」と友達の見方や考え方、感じ方で自分の考えが強化されることも含む。



働き掛け3
働き掛け1で問うた場面と同様の場面について「自分だったらどうするか」と問い、理由を記述させる。

よりよい解決方法を判断させるための働き掛けである。働き掛け1で問うた場面と同様の場面において「自分だったらどうするか」と問う。子どもは、関係付けるすべを用いて、自分の生活経験と主人公の行為や気持ちを結び付けて考え、自分だったらどうするかを判断する。そして、「失敗したときには、ごまかしたいという気持ちはあるけれど、その場で正直に言うことが大切なんだ」と記述する。

ワークシートは、働き掛け1と働き掛け3「自分だったらどうするか」の記述が並ぶような形にする。そうすることで、子どもは自分の見方や考え方、感じ方の変容に気付きやすくなる。

「学びをつなぐ力」の自覚を促す働き掛け
働き掛け1と働き掛け3を比較させ、考えが変わった理由、または、変わらなかった理由を問う。

「学びをつなぐ力」の自覚を促す働き掛けである。資料の場面を通して、よい解決方法を創り出し、「自分だったらどうするか」と場面の状況に合ったよりよい解決方法を判断した子どもに、働き掛け1と働き掛け3の記述を比較させる。記述が変化している子どもには、変化の理由を問う。また、変化していない子どもには変化していない理由を問う。子どもは、何がきっかけで自分の考えが変化したのかを考えたり、なぜ変化しなかったのかを考えたりする。そして、「〇〇さんの考えを聞いたから変わった」「友達の考えを聞いたけれど、やっぱり△△が大事だと思ったから変わらなかった」などと、道徳的価値に基づいて、よりよい解決方法を見いだす子どもとなる。

6 本時の構想 (本時 2/2時間)

(1) ねらい

関係付けるすべを用いて、自分の生活経験と主人公のぼくの行為や気持ちを結び付けて考え、よりよい解決方法を見いだすことができる。

(2) 主張(展開) 3Q (45分)

このような子どもに

- 悪いことをしたときは、謝らなければならないことを知っている。
- 悪いことをしたとき、素直に言うことは知っているが、なかなか言い出せなかったことがある。
- 怒られるのが嫌だという理由で、自分がしたことをごまかそうとしたことがある。

このように働き掛けると【働き掛け1】

- 資料の場面①を人形劇で提示し、主人公に共感させ、似た生活経験を想起させる。
 - ・説明「今日のお話は、「いばるな、トマト」というお話です。ちょっと覗いてみましょう」
- ※子どもを黒板の前に集め、読み聞かせる。
- ※読み聞かせると同時に、ハンドパペットで人形劇を行い、資料の場面を三次元の場として提示する。
- ※登場人物の確認をする。
 - ・発問「ぼくの気持ちって、どんな気持ちか分かりますか。どんな気持ちなのでしょう」
 - ・発問「みんなにも似たようなこと、ありますか」
 - ・指示「似たような出来事を、できごと財布で探してみましょう」
- ※数人の子どもに経験を語らせてから、次の発問をする。
 - ・発問「〇〇さんみたいに、言えないなっていう人は手を挙げてください」
 - ・説明「みんなにも、似たような出来事があるのですね」
- ※経験を語らせている中で、主人公の気持ちから離れそうな場合には、資料に立ち返らせる。主人公の気持ちを確認する。
- 主人公のぼくの気持ちに共感させ、自分だったらどうするかを考えさせる。
 - ・発問「じゃあ、自分がぼくだったらどうしますか」
 - ・補助発問「それは、どうしてですか」
 - ・指示「ワークシートに書きましょう。理由も書きましょう」

このようになり (C1) ※本時のC0

- 本時の道徳的価値(正直, 誠実)を確かめ、自分の経験とかかわらせて考える。
 - ・どんなお話かな。
 - ・分かる, 分かる。
 - ・ドキドキする気持ち。
 - ・やっちゃったってやばいなって思う気持ち。

- ・やっちゃって、でもなかなか言えなくごまかしてしまったことがありました。
- ・前に、お母さんのお皿を割っちゃって、怒られるのが嫌で隠しておいたことがあります。だから、ぼくがドキッとする気持ちがよく分かります。【自分の経験】
- ・やばいって思うけど、ごまかしちゃったことがあります。【自分の経験】

○正直、誠実という道徳的価値に基づいて、自分だったらどうするかを考える。

- ・自分がぼくだったら、なかなか言い出せません。だって、先生に怒られるかもしれないからです。だから、言わないで黙っていると思います。
- ・ぼくだったら、ごめんねとはなかなか言い出せません。できれば、ばれないようにごまかしたいです。だって、友達が集まってきて騒ぎになっている中では言い出しにくいからです。
- ・自分がぼくだったら、ごめんねって言います。前に、ごまかしていて、ばれたときにすごく怒られたから、それからは正直に言おうと思ったからです。
- ・ぼくだったら、正直に言います。でも、言うときはドキドキします。言わなきゃいけないのは分かるけれど、みんなに何か言われそうだからです。

【C0の基準】

自分の経験と「自分だったらどうするか」で考える行為が一致している子ども。

例えば 自分の経験：「ごめんね」とは言えない。 考える行為：「ごめんね」とは言えない。
自分の経験：「ごめんね」って言う。 考える行為：「ごめんね」と言う。

ここから本時

このように働きかけると【働き掛け2-①】

○資料の場面②を提示し、このときのぼくの行為や気持ちを経験と関係付けて考える。

- ・説明「昨日の道徳で、みんながぼくだったら、「言うよ」「言わないな」「迷うな」って言っていましたね。さあ、ぼくは、このあとどうしたのでしょうか。続きを覗いてみましょう」

※読み聞かせると同時に、ハンドパペットで人形劇を行い資料の場面を三次元の場として提示する。

※場面は、資料①の内容も含んで行う。

- ・説明「次の日、学校に行くときみんながけんじくんの野菜の話をしていました。ぼくは、なかなか言い出せずに黙っていたようです。」
- ・発問「どうしよう…って、ぼくはどんな気持ちか分かりますか」

※「言い出せなくて大ごとになってしまった」というな、黙っていることで更に悪い状況になってしまったというようなつぶやきがあれば、次のように発問する。

- ・発問「似たようなことはありましたか。できごと財布で探してみましよう」
- ・指示「なるほど、ドキドキして言い出せなくなったことがあるんですね。同じように思う人はいますか」

このようになり (C2-①)

○ぼくが黙っていたことで、大騒ぎになってしまったということを知り、主人公の気持ちと自分の生活経験とを関係付けて考える。

- ・言えなかったのか。大変なことになってしまったよ。
- ・分かるよ。言わなくちゃって思っているけど、みんなの前だと言えなくなるよ。
- ・ますます言い出せなくなるよ。
- ・どうするの？ どうなるの？
- ・言えない気持ち分かるよ。だって、みんなが騒ぎ出したら言い出しにくくなるよ。
- ・ばれたらどうしようって、すごくドキドキすると思います。
- ・辛くて、苦しいと思います。
- ・前に、妹のものを壊してしまって、隠していたことがありました。でも、黙っていたら妹が泣き出してしまって結局あとで私が壊したよって言ったら、ものすごく怒られたことがあります。でも、怖くてドキドキして言い出せませんでした。【自分の経験】
- ・同じようなことがあって、言わなくちゃって分かっているんだけど、でも怒られるのが怖くてなかなか言い出せなくて、そのうちにお母さんがものすごく怒り出して、それでも怖くて言えなかったことがありました。ものすごくどうしようって思ってドキドキしました。【自分の生活経験】

このように働きかけると【働き掛け2-②】

○資料③(対象)を提示し、問いをもたせる。

- ・説明「ぼくは、一体このあとどうしたのでしょうかね。続きを覗いてみましょう」

※資料③を提示した後、子どもから「すごい」(主人公行為を賞賛する声)や「う〜ん」(主人公の行為に疑問を感じる声)というつぶやきがあれば、次のような発問で、取り上げる。

- ・発問「今、すごいって言ったのはどうしてですか」
(発問「今、おかしいよって言ったのは、どうしてですか」)
- ※資料③の提示後、つぶやきがなければ、主人公の行為についての反応を促す発問を行う。
- ・発問「ぼくは、正直に言えて偉かったね。謝って解決したね、どう思う」
- ※主人公の行為に対して、賞賛や疑問の声を受けて、「同じように思う人はいるか」と問い、挙手した子どもを問いをもった姿とする。
- ・説明「ぼくがしたことについて、よいって思っている人と、おかしいよって思っている人がいるみたいですね」
- ・指示「ぼくがしたことについて、もう1回、考えてみようか」
- ※学習課題 「◎ぼくがしたことをどう思いますか」と板書する。
- ・指示「ネームプレートを貼りましょう」
- ※直線の両脇に、よい・よくないを記し、その間にネームプレートを貼らせ、ぼくの行為を評価させる。
- ・指示「ネームプレートが貼れましたね」
- ・発問「どうして、そこに貼ったのですか」
- ※貼った場所についての根拠を発表させる。
- ※話し合いの中で、考えが変わったという発言があれば、移動してもよいことを伝える。
- ※移動した場合は、誰の考えがきっかけとなったのか、どうして移動したのかを覚えておくように伝える。
- ・補助発問「どうして(ネームプレートを)変えたのですか」

このようになり (C2-②)

○ぼくが取った行為を知り、自分の生活経験と主人公のぼくの行為や気持ちを結び付けて考え、よりよい解決方法を見いだす。

- ・素直に言えたんだね。すごい。がんばったね。 → 主人公の行為を賞賛するつぶやき
- ・でもさ、ちゃんと謝ったよ。あんなにドキドキしていたのに謝れたよ。
- ・なかなか言えない中で、ちゃんと言えたからすごいと思うよ。
- ・なんだかすっきりしません。どうしたらいいのだろう。どうせ謝るなら早い方がいいよ。
→ 主人公の行為はよいとしながらも賞賛できないつぶやき

※ネームプレートを貼る。

※貼った場所の根拠を話す。

か らです。その日にごめんねって言えば、ここまで大騒ぎにはならなかったと思うからです。

- ・よくないに貼りました。言いにくいのは分かるけれど、謝るなら早い方がいいと思うからです。

※友達の考えを聞く。

- ・言い出しにくいのは分かるけれど、やっちゃったときに言うのが大事なんだよね。
- ・私は、ぼくはすごく偉いと思っていたけれど、確かにもっと早く言わないといけなかったかもね。
- ・みんなの考えを聞いていたら、ネームプレートの場所を変えたくなくなったな。変えてもいいですか。

☆問い☆

主人公の行為に対して、賞賛や疑問の声を受けて、「同じように思う人はいるか」と問い、挙手した子どもを問いをもった姿とする。

☆学びをつなぐ力☆ (検証の方法 ②-1)

働き掛け2を受けて、関係付けるすべを用いて、自分の生活経験と主人公のぼくの行為や気持ちを結び付けて考えているかどうかを、発言から検証する。

このように働き掛けると【働き掛け3】

- 資料①の場面で「自分だったらどうするか」と再度問い、よりよい解決方法を判断させる。
- ・説明「授業の始めに、「自分だったらどうしますか」と聞きました。もう一度、同じことを聞きます。言おうかな、どうしようかなと迷ったときです」
- ・発問「このとき、自分だったらどうしますか」
- ・指示「ワークシートに書きましょう。そのように考えた理由も書きましょう」

このようになり (C3)

○資料①の場面でどのような行為を取るかと考え、その理由も記述する。

自分の経験や話し合いの中から見いだしたことを基に判断する姿。

- ・失敗したときにごまかしたい気持ちはあるけれど、その場で正直に言おうと思います。
- ・早いうちに謝ろうと思います。だって、黙っていたら大変なことになるかもしれないし、みんな

なからもいろいろ言われてしまいそうだからです。

- ・言いにくい気持ちはあるけれど、すぐにごめんねって言おうと思います。後になると、謝りにくくなると思うからです。
- ・悪いことをしたときには、すぐに謝ることが大事なので、ごめんねって言います。

【通過基準】☆学びをつなぐ力☆（検証の方法 ②-2）

ア：「学びをつなぐ力」 イ：中核的な学習内容

ア 働き掛け3を受けて、関係付けるすべを用いて、 のように自分の生活経験を基に、 のように主人公のぼくの行為や気持ちを結び付けて考えているかどうかを、ワークシートの記述から検証する。

イ のように、働き掛け2で見いだした解決方法の中から「自分だったらどうするか」と自分の生活経験とを結び付けて判断している子どもを、「中核的な学習内容」を創り出している姿とする。

※働き掛け1の記述と比較し、価値観の高まりを見取れるものを通過者とする。

~~~~~ ここまで本時 ~~~~~

### 「学びをつなぐ力」の自覚を促す働き掛け

○働き掛け1と働き掛け3の考えが変わった理由、または変わらなかった理由を問う。

- ・説明「授業の始めと終わりに「自分だったらどうしますか」と2回聞きました」
- ・発問「自分の考えは変わりましたか。変わった人は、どうして変わったのですか。変わらなかった人は、なぜ変わらなかったのですか。理由を書きましょう。

※ワークシートの記述を見ながら振り返らせ、記述させる。

### このようになる (Gn)

○本時で学習したことを基に、自分の考えを振り返る。

【変わった】

- ・自分だったら、言えないなと思っていましたが、○○さんの話を聞いていたら、こういう場合は正直に言わないといけないと思いました。言いつらいけれど、言うことが大事なんだと思いました。

【変わらなかった】

- ・みんなの考えを聞いて「なるほどな」と思った。だから、やっぱり始めから正直に言うことが大事だと思うからです。言えないのは、弱いからで自分が悪いときには、正直にごめんねっていうことが大事だと思います。

## 7 検証

### (1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、「中核的な学習内容」を創り出すことができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を発揮することができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を自覚することができたか。

### (2) 検証の方法

① 働き掛け3を受けて、                    のように、働き掛け2で見いだしたよい解決方法の中から「自分だったらどうするか」生活場面にかかわらせて判断している子どもを、ワークシートの記述から検証する。

②-1 働き掛け2を受けて、関係付けるすべを用いて、自分の生活経験と主人公のぼくの行為や気持ちを結び付けて考えているかどうかを、発言から検証する。

②-2 働き掛け3を受けて、関係付けるすべを用いて、                    のように自分の生活経験を基に、                    のように主人公のぼくの行為や気持ちを結び付けて考えているかどうかを、ワークシートの記述から検証する。

※②-1、②-2のいずれかで、「学びをつなぐ力」を発揮しているかどうかを検証することとする。

③ 「学びをつなぐ力」を自覚しているか、                    のように働き掛け1と働き掛け3で考えが変わった理由、または変わらなかった理由をワークシートの記述から検証する。